

09

サルエルパンツに関する考察

第1報 サルエルパンツに対する若者の動向と意識

A study of 'Sarrouel Pants'

The first report: The trends and opinions of 'Sarrouel Pants' among the youth

ファッション造形学科・教授

Department of Fashion Design・Professor

高間 由美子 Yumiko TAKAMA

ファッション造形学科・准教授

Department of Fashion Design・Associate Professor

木村 佳津子 Kaduko KIMURA

最近の衣服には、生活の多様化と情報の影響を受けつつ、生活の気分を楽しみながらファッションを味わうところが見受けられるようになった。野暮な登山姿の中に花が咲いたような山ガールファッションもその現れであろう。しかも従来のデザイン、素材、色、体型、機能性、着こなしなどに加え、シルエットがきれい、質が良い、背景やコンセプトがはっきりしている、意味がある、男女差が曖昧なものなど様々な要因を受けながらファッション性が高められてきている。男女差の曖昧さの中には、男性がスカート風のをパンツに重ね巻いたり、古着においては、男性物、女性物に関わらず、気に入れば、男性が女性物を女性が男性物を着用することもままあったりする。そうかといえば、ルーズであったり、フィット感で着こなしを試みたり、引きずる感もあればロールアップもあり、何が流行で何が正統な着こなしかがわからなくなっている。要するに、自分だけの1着を求める若者が増えてきているのである。巷にあふれる流行商品よりは、独特の雰囲気を持った個性的な1着に価値を見出す昨今でもある。

パンツもしかりである。パンツのシルエットは多種多様にデザイン展開されている。ディテール、シルエット、素材、着こなしなど様々である。しかも、パンツでないとおしゃれでないというくらいパンツが好まれて、その中には、図1、図2、図3のようなシルエットのサルエルパンツも見受けられるようになった。そして、サルエルパンツは若者だけのパンツであると思っていたが、近頃、中高年には異質なスタイルであるはずのそれを中高年自身が着用している姿さえ見かけるようになったのは驚きである。つまり、サルエルパンツも老若男女問わずに穿かれているのである。ということは、気に入らさえすれば、年齢や男女差に拘らず着用するというのが、このサルエルパンツのコンセプトでもあるのかもしれない。

昨年夏は、多くの若者のサルエルパンツが目立ったことも記憶に新しい。もちろん中高年のサルエルパンツも混在していることも忘れてはならない。

サルエルパンツは、ファッション性の豊かさと、おしゃれ感を兼ね備えたファッションスタイルのアイテムのひとつとされている。服飾事典によれば、サルエルパンツ(Sarrouel pants)とは、『股下がなく、裾が輪になり、足を出す部分だけがあいているパンツのこと。袋の底の両脇に穴をあけ、そこから足を出したようなパンツのことで、スカートとズボンの中のようなもの。』と定義されている。すなわち図3のようなパンツであるが、図1、図2もサルエルパンツと呼ばれているのである。



図1



図2



図3

私の担当している学生達の多くも個性的なサルエルパンツを着用している。彼らもこれらのスタイルに興味を示し、製作意欲も高いことが窺える。実際に着用している学生に、「穿き心地はどう?」と、問いかけると、「良いですよ」、「穿きやすい」という言葉が返ってくる。我々にとっては半信半疑である。階段の上がり降りは、走れるの、自転車には乗れるの、足の開脚はどこまでなの、疑問は募るばかりである。いわゆる股下が引っ張られて危なっかしい感じさえするのである。そんなサルエルパンツが、いま、なぜ人気なのだろうかとの思いが今回の研究のきっかけとなった。

そこで第1報では、若者のサルエルパンツ風の股上の長いパンツについて、アンケート調査を行い、動向と実態を探ることを目的とした。

2 サルエルパンツの起源とパターン紹介

冒頭にも述べたように、サルエルパンツとは股下がなく、裾が輪になり、足を出す部分だけがあいているパンツのことであるが、そのサルエルパンツをこの章ではシャルワールで表現する。

シャルワールはイスラム教信者の穿く民族衣装であり、国によってシャルワール、サルワール、サルール、シャルワ、サルアルなどと様々な名称を持つ興味深いパンツでもあり、イスラム教が広まると一緒に、このパンツ伝わっていったと思われる。

このシャルワールは、国により、名称、用途、着装などに特徴がみられる。パキстанは、イギリスの植民地であったインドから分離独立した国であり、イスラムの宗教的戒律による特殊な衣服のほかは、インドとかなり似かよったものが多く、地域社会ごとに種々な服の組み合わせがみられる。形もまったく同じもので、男女共にシャルワールを穿き、そのひとつのパターンとして、カミスと呼ばれる長上衣とシャルワールにスカーフのドゥバタの組み合わせがある。

トルコでは、旧都イスタンブール(コンスタンチノーブル)がキリスト教、イスラム教の拠点であったため、この地は東西文化、物資交流の地として繁栄し、民族衣装はとくにサルタン宮廷のハーレムスタイルが象徴的なものとされていた。しかしその後、1923年以来ケマル・パシャの新トルコ樹立により、全面的な生活改善が行われ、イスラム教婦人の顔をおおう服装も廃止され、衣生活は一般に西欧に近い服装になった。以来、世界的に知られるハーレムの服装は、日常生活ではみられなくなり、今日では舞踏衣装などの観光用にその姿をとどめるのみとなった。そのハーレムスタイルの代表的なものは、幅広の四角いビロード布に、足を入れる部分だけ残して袋状に縫ったダブダブのズボン穿いたものをシャルワールと呼ぶ。上衣は直線裁ちの長そでボレロを組み合わせるのである。

その他には、トルコの東のモンゴルのシリンドル草原で行われるナダム祭では、相撲力士が穿くシャルワールがある。ただし、その名はモンゴル語でボツヒン・オモトといい、ボツヒンは相撲、オモトはズボンの意であり、このような伝統継承のみに穿かれているシャルワールも存在する。また、16世紀にスペインやポルトガル人が日本に来た様子を描いた南蛮屏風には、トルコのシャルワールが穿かれている。これは、スペインやポルトガルは、トルコ人と同じイスラム教を信仰していた北アフリカのムーア人に征服され、800年近く支配されていた経緯に由来しているからである。美しいビロードのシャルワールに、ラシャのマント姿が描かれ、ポルトガル語でこの膨らんだズボンのことを“カルサン”と呼んでいた。日本人もこれを真似て、その頃、穿いていた袴に手を加え、“軽衫(かるさん)”というものを作った。それが日本国技の大相撲の呼出しの服装として現存している。

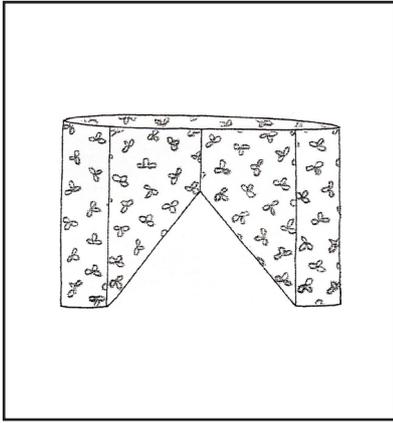


図4:パキスタン



図5:トルコ

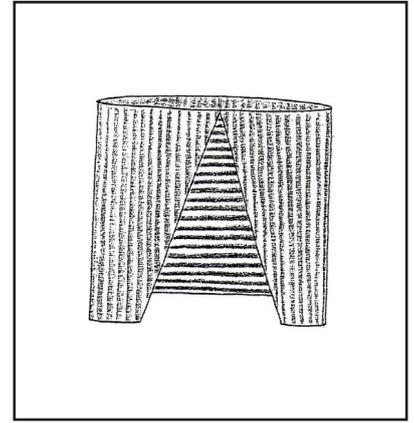


図6:ウズベク

次に、松本敏子氏が福音館書店刊行の『たくさんの不思議』の中で、民族服のシャルワールを気に入った記述があったのでここに紹介する。5月にインドへ行った折、1年中で一番暑い季節、日中は43度を超える毎日に、日本から持って行ったズボンでは暑くてあせもが出来てしまう。そこで、インド人が着ている民族服、つまりシャルワールに着替え、歩いてみた。するとどうだろう、ゆったりしていて、涼しく、しかも、しゃがんでも、膝をたてても、足を大きく広げても、少しも窮屈ではなかったのである。こんなにも穿きやすく、どこも締め付けられないシャルワールは、その後の衣服調査でも大いに役立ったと述べている。

このように、シャルワールのデザインは、国別により様々に異なるであろうが、デザインそのものは大きく変わるものではなかった。図4から図6のシャルワールは、松本氏の紹介した一部であるが、すべての股に別布のマチがついているのがわかる。

ここに図3のサルエルパンツに近いデザインで、もっとも簡単なシャルワールの作り方を図7、図8、図9で紹介する。素材はうすい

木綿を使用し、横は布幅そのまま、縦地は欲しいズボン丈(例:ウエストから足首)の2倍に、ウエストのゴム通しとして6~8cmの長さを準備し、足首を出す位置で切り込みを入れ、それを三つ折りにして、ほつれないよう始末をする(図7)。その三つ折りの足首位置で中表に折り、両端の耳を縫い合わせる(図8)。ウエストは部分は、ゴム幅に合わせて三つ折りにし、ゴムを通して出来上がりである(図9)。

このような民族服からなるシャルワールが、エスニックブームに乗って若者に好まれたきっかけになったのが、1977年のパリコレクションであった。股の部分がおしめのようにつながった下体位をシャルワールと呼び、これをモチーフにデザインされていた。これをベースとしたサルエルパンツが一般化し、登場したとの説もある。このシャルワールのディテールは、シルエット、素材、色、柄、マチ、ゆとり等によってさまざまに変化し、楽しむことが好きな若者に普及した所以であろう。このように若者は若者らしく、クオリティの高さでシャルワール、つまりサルエルパンツをファッションに取り入れているのである。

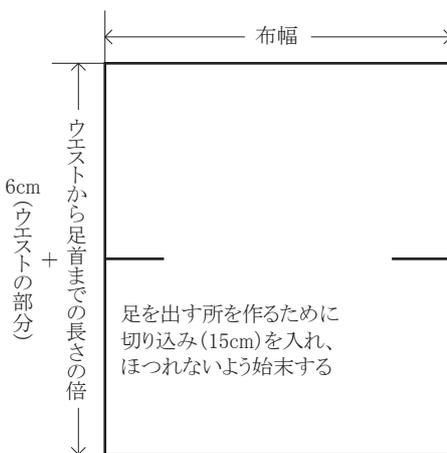


図7

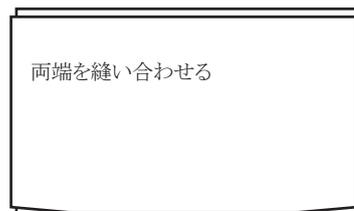


図8

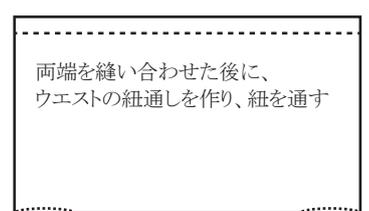


図9

3 アンケート調査

3.1 調査方法

調査時期は2011年4月中旬に質問紙を用い、集合調査法で行った。調査対象者は、2大学の学生の1回生から大学院生までの240名で、内訳は男性34名、女性206名である。回収率は100%で有効回答率は94.2%であった。設問内容はサルエルパンツの認知度、着用経験、好み、穿き心地、活動度、所持枚数、着用頻度などの14項目である。集計方法は単純集計、クロス集計を行った。なお、アンケート調査での回答意識の統一性を図るために、学生達が好んで穿いていると思われる図10、図11のようなサルエルパンツの類似デザインを数点見せた上で、回答を得た。



図10



図11

3.2 結果および考察

アンケート結果から、まず、「サルエルパンツを知っているか」との設問では、98.2%の学生が知っていると答えた。「好きですか」との好みの設問では、好き63.75%、嫌い9.33%、わからない27.0%であった。

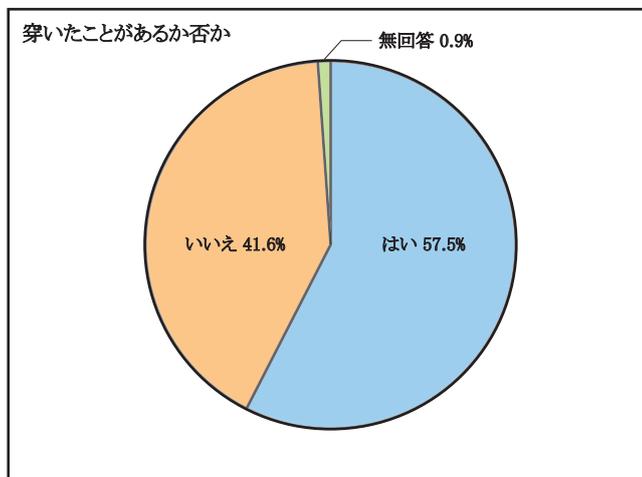


図12: 着用の有無

では、「穿いたことがあるか」との着用の有無を尋ねてみた。図12のように、穿いたことがある57.5%、穿いたことがない41.6%、無回答0.9%の回答であった。図13の「穿いてみたいか」との着用願望からの設問では、穿いてみたい74.3%、いいえ17.3%、わからない8.4%であった。また、男女別では、男性の穿いてみたいが52.95%、女性の穿いてみたいが59.71%であった。これらから認知度は高かったものの、「好きですか」との設問では、嫌い、わからないと回答した人を合わせると36.33%の若者が興味を示さなかった。

がしかし、「穿いてみたいか」との設問では、いいえ、わからないと回答した人は、25.7%あったことから、好きという興味は示さなかったものの、穿いてみたいと思った人もわずかながら含まれていたことがわかる。

また、穿いてみたいと思っている若者は約74.3%に対して、穿いたことのある若者は約57.5%であったことから、穿きたくても穿く機会がなかったことが窺える。さらに、サルエルパンツを穿いてみたい人が74.3%あったにもかかわらず、好きと答えた人が63.75%という結果が得られたことは意外であった。また、穿きたくないとわからないを合わせた回答者が25.7%あったことは、若者の多くはサルエルパンツに興味を持っているという先入観もあったのではと感じ取れる結果であった。

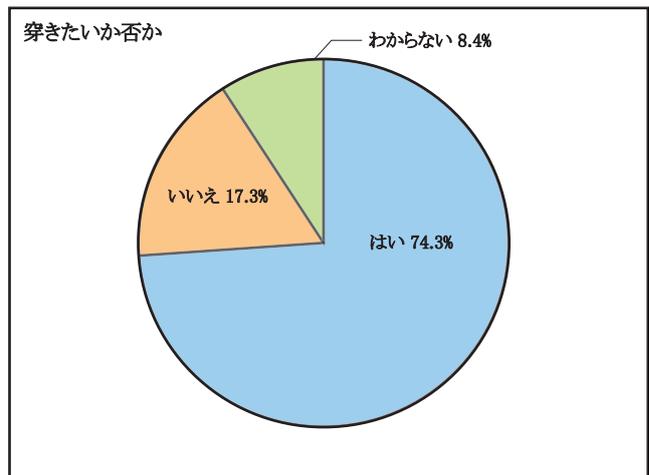


図13: 着用願望

それを表1のように「好み」と「着用願望」のクロス集計を行った結果、好きと答えた人の穿いてみたい人数は134人であったが、有意差はみられなかった。

表1: 好みと着用願望 (人数)

| 着用願望 | 好み | | | 総計 |
|----------|-----|----|-------|-----|
| | 好き | 嫌い | わからない | |
| 穿いてみたい | 134 | 1 | 33 | 168 |
| 穿いてみたくない | 9 | 19 | 11 | 39 |
| わからない | 1 | 1 | 17 | 19 |
| 総計 | 144 | 21 | 61 | 226 |

表2: 着用の有無と着用願望 (人数)

| 着用願望 | 着用の有無 | | 総計 |
|-------|-------|-----|-----|
| | はい | いいえ | |
| はい | 120 | 48 | 168 |
| いいえ | 7 | 32 | 39 |
| わからない | 5 | 14 | 19 |
| 総計 | 132 | 94 | 226 |

** : p<0.01

そこで、「着用の有無」と「着用願望」についてのクロス結果を表2でみてみると、穿いたことがあると答えた人の着用願望の人数は、120人であった。穿いたことのないと答えた人の着用願望の人数は48人であり、有意差がみられた。

次に、着用経験者のみに設問をした。着用したことのある若者から、「穿き心地」を尋ねてみた。とてもよい36.2%、まあまあよい38.5%、普通18.5%、あまりよくない4.6%、悪い1.5%、無回答0.8%の結果であった。とてもよいとまあまあよいが74.7%と高い比率を占めたことから、穿き心地は概ね良好であったことがわかる。

続いて図14のように、「動きやすさ」の設問をしてみた。とても動きやすい21.5%、まあまあ動きやすい33.8%、普通25.4%、あまりよくない15.4%、悪い3.1%、無回答0.8%であった。過半数の若者からは、動きやすいとの回答が得られた。

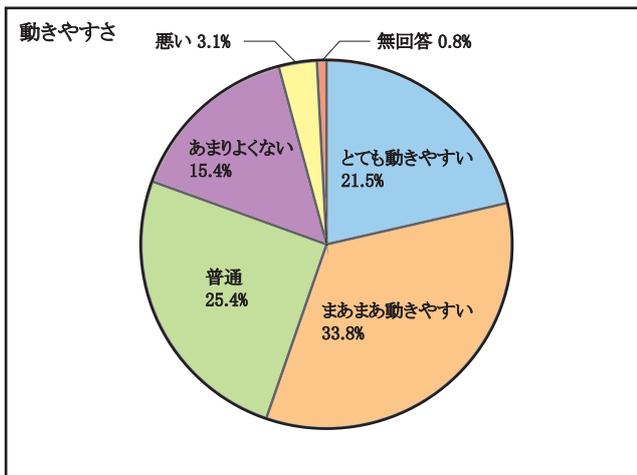


図14: 動きやすさ

以上から、穿き心地や動きやすさは、概ね良好であったことが伺える。しかし、穿き心地の悪さと動きにくさへの回答も多くあり、今後の課題にしたい。特に、動きやすさについては、普通25.4%、あまり良くない15.4%、悪い3.1%と高い比率を占めたので今後も注目していかなければならない。

表3の「動きやすさ」と「穿き心地」についてのクロス集計からは、とても動きやすいと答えた人の穿き心地のとてもよい人数は21人であり、まあまあ動きやすさと答えた人の穿き心地もまあまあ良い人数は21人であり、有意差がみられた。

表3: 動きやすさと穿き心地 (人数)

| 穿き心地 | 動きやすさ | | | | | 総計 |
|---------|----------|------|----|---------|----|-----|
| | とても動きやすい | まあまあ | 普通 | あまりよくない | 悪い | |
| とてもよい | 21 | 18 | 4 | 4 | 0 | 47 |
| まあまあよい | 6 | 21 | 17 | 6 | 0 | 50 |
| 普通 | 1 | 5 | 11 | 5 | 2 | 24 |
| あまりよくない | 0 | 0 | 1 | 5 | 0 | 6 |
| 悪い | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| 総計 | 28 | 44 | 33 | 20 | 4 | 129 |

**

表4: 穿く頻度と穿き心地 (人数)

| 穿き心地 | 穿く頻度 | | | 総計 |
|---------|------|-------|---------|-----|
| | よく穿く | たまに穿く | あまり穿かない | |
| とてもよい | 17 | 28 | 2 | 47 |
| まあまあよい | 4 | 25 | 21 | 50 |
| 普通 | 2 | 11 | 11 | 24 |
| あまりよくない | 1 | 1 | 4 | 6 |
| 悪い | 1 | 0 | 1 | 2 |
| 総計 | 25 | 65 | 39 | 129 |

**

同様に、表4の「穿く頻度」と「穿き心地」についてのクロス集計からも、良く穿くと答えた人の穿き心地がとても良い人数は17人、たまに穿く人と答えた人の穿き心地がとても良い人数は28人、あまり穿かないと答えた人のまあまあ穿き心地の人数は21人であったことから有意差がみられた。

次に、「所持枚数」について尋ねてみた。所持枚数は1枚48.5%、2枚23.8%、3枚8.5%、4枚10.0%、5枚以上8.5%、無回答0.8%であったことから、興味本位と思われる1枚が一番多くあった。それに比べ、気に入って穿いている若者の所持枚数の4、5枚に及ぶ比率は18.5%と高い回答には驚かされた。つまり、気に入った若者は何枚も所持していたのに対して、ほぼ半数の若者は1枚のみで留まっていたことが窺える。これは穿いてみたい、流行だから、夏だからとの一過性の理由から所持したのであろうと推測される。

図15の「着用頻度」は、よく穿く19.2%、たまに穿く50.0%、あまり穿かない30.0%、無回答0.8%の回答であった。

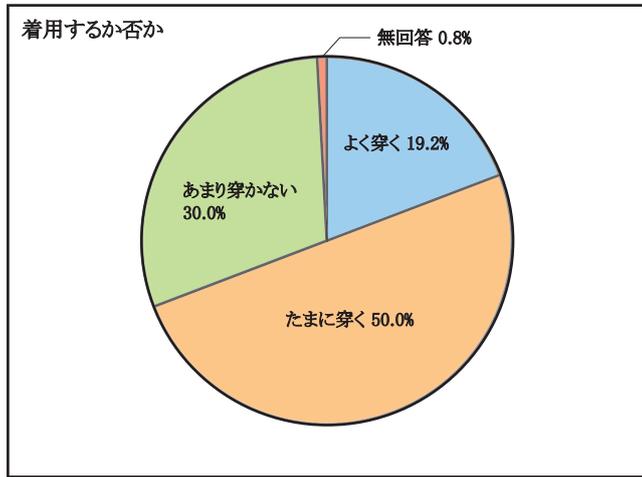


図15:着用頻度

表5:動きやすさと着用頻度 (人数)

| 着用頻度 | 動きやすさ | | | | | 総計 |
|---------|----------|------|----|---------|----|-----|
| | とても動きやすい | まあまあ | 普通 | あまりよくない | 悪い | |
| よく穿く | 6 | 9 | 2 | 7 | 1 | 25 |
| たまたま穿く | 18 | 23 | 21 | 3 | 0 | 65 |
| あまり穿かない | 4 | 12 | 10 | 10 | 3 | 39 |
| 総計 | 28 | 44 | 33 | 20 | 4 | 129 |

**

表5の「動きやすさ」と「着用頻度」についてのクロス集計からは、とても動きやすいと答えた人の着用頻度はたまたま穿く人数で18人と有意差がみられた。

更に図16は、「穿く理由」を複数回答で得られた結果である。楽だから61.5%、おしゃれだから56.2%、好きだから44.6%、体型隠し31.5%の順であったことから、春夏は、ゆったりとしていると涼しく着られ、それでいて体型隠しになる利点が好まれた理由であろう。好きだから、おしゃれだからは、ファッションに敏感な若者の

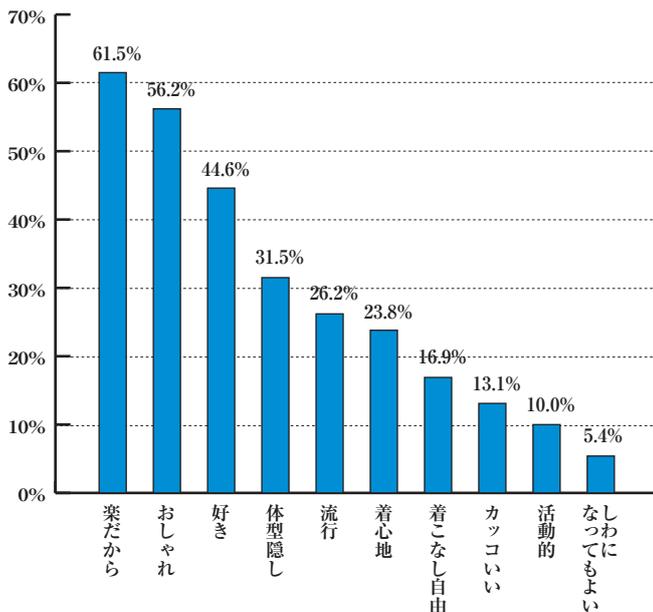


図16:穿く理由

感想と受け止めたい。しかしそうであれば、流行、着こなし自由、カッコいいの内容にも高い比率を占めてもよかったのではないだろうか。その予測は大きく外れた。着心地(穿き心地)、着こなし活動的からは、高い比率が窺割れなかったのは、サルエルパンツへの穿き心地がよくなかったのであろうか。「穿き心地」の設問では、良かったとの回答者は74.7%であったことから、ファッションの内容が前面に出るとそちらへ流れてしまうようである。設問の仕方への難しさも感じ取れた。

そこで、「着用の有無」の設問で穿いたことのない41.6%の回答者に、「穿かない理由」を複数回答で尋ねてみた。その結果は、図17のような結果であった。「好み」のくくりとしては、カッコ悪い、嫌い、おしゃれではない、流行ではないなどを合わせた比率は低かった。同様に「着用感」のくくりでは、着こなしにくい、穿きにくそう、活動的ではない、着心地が悪いなどに高い比率を占めたことに特徴がみられた。「外見から」のくくりでは、体型が出る、しわになるからの内容からは低かった。これらから、若者のサルエルパンツを穿かない理由としては「好み」のくくりの比率が一番多いと推測していたが、「着用感」からの比率が一番多い結果になったことがわかった。

しかし、穿いたことのない人(94人)が、穿いてみたいかとの設問では、穿いてみたい48人、穿きたくない32人、わからない14人の内訳だったことから、穿いたことのない人も穿いてみたいとの着用願望が高かったことが窺われた。

若者の未着用理由は、流行や見かけだけの判断ではなく、着用感という機能性や着心地の悪さを推量していたことは意外な結果であった。このことから、サルエルパンツの機能性、着心地の良し悪しの理由を導き出し、改良に繋げることが、今後の課題となろう。

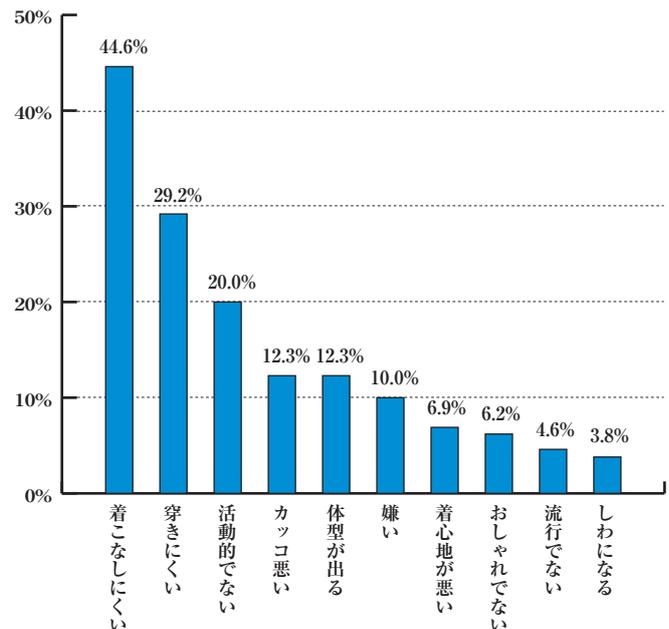


図17:穿かない理由

さらに、設問では回答しにくい理由を「その他」の項目に記述式で尋ねた結果をまとめてみる。“穿きたいが穿く機会がなかった”理由からは、①欲しい形・色が見つからなかった、②買う機会がなかった、③穿きこなせないから等が多かった。“まったく穿く意思がない”理由からは、①自分には似合わない、②穿く勇気がない、③太って見える、④足が短くみえる、⑤股下のデザイン的ゆとりが嫌、⑥自転車やバイクに乗れない、⑦流行が過ぎるまで待つ等であった。このことから、サルエルパンツは、穿く勇気も必要である共に、股下のゆとりがかえって穿きづらい、自転車に跨ぎづらいなどが着用しづらいキーポイントになったようだ。筆者達も同感であった。

この結果を踏まえうえて、サルエルパンツの着用経験者に対して次の設問をした。それは今後の「着用意思」を尋ねることである。着用意思がある71.5%、ない3.1%、わからない20.0%、無回答5.4%の結果であった。このことから、着用意思のある人は、「穿き心地」が良いと答えた人(とてもよい36.2%、まあまあよい38.5%)74.7%と同等な比率が得られたことから、今後も着用意思があることが推測される。

また、今後の着用意思がない、わからない、無回答を合わせると28.5%になった。これは、穿き心地の悪さに回答した人(普通18.5%、あまりよくない4.6%、悪い1.5%)の合計が24.6%であったことから、今後の着用意思がないことにつながる結果であると考えられる。

更に、所持枚数から読み取ると、1枚の所持枚数者に、穿き心地が普通14人、あまりよくない3人、悪い1人に多くあったことからわかった。そして、今後の着用意思がわからないと答えた20%の内訳からは1枚の所持枚数者が一番多い回答者であったことから、着用経験者の浅さがこの回答に至ったと考えられる。

4 おわりに

アンケートの結果、次のようなことが窺えた。

- 1) サルエルパンツの認知度は高かったが、36.33%の若者が好きとは言えなかった。
- 2) 好きではないが穿いてみたいと興味を示した人が意外に多くあった。
- 3) 穿き心地や動きやすさは概ね良好であったが、穿き心地の悪さと動きにくさへの回答も多くあったことも考慮しなければならない。
- 4) サルエルパンツを気に入っている回答者は何枚も所持していたが、約半数の回答者は1枚のみで留まっていたことは穿いてみたい、流行だから、夏だからとの一過性の理由と推測される。
- 5) サルエルパンツの未着用理由は、流行や見かけだけの判断

ではなく着用感という機能性や着心地の悪さを推測できた。

6) 若者のパンツへの思いと実際に穿きたいとの思いには、必ずしも一致しないことがわかった。着用感が良ければ、あるいは着心地がよければ、着用意思があることが窺われた。

7) サルエルパンツは、股下のゆとりがあり過ぎて穿きづらい、自転車に跨ぎづらいなどの着用しづらいキーポイントになった。

8) サルエルパンツのデザインは多種多様にあるため、1枚しか持っていない若者にも数枚持っている若者と同様の設問として、穿き心地や機能性を問うたことには、やや無理があったかもしれない。何枚もの着用者だからこそ判断できる設問もあることを理解しなければならなかった。

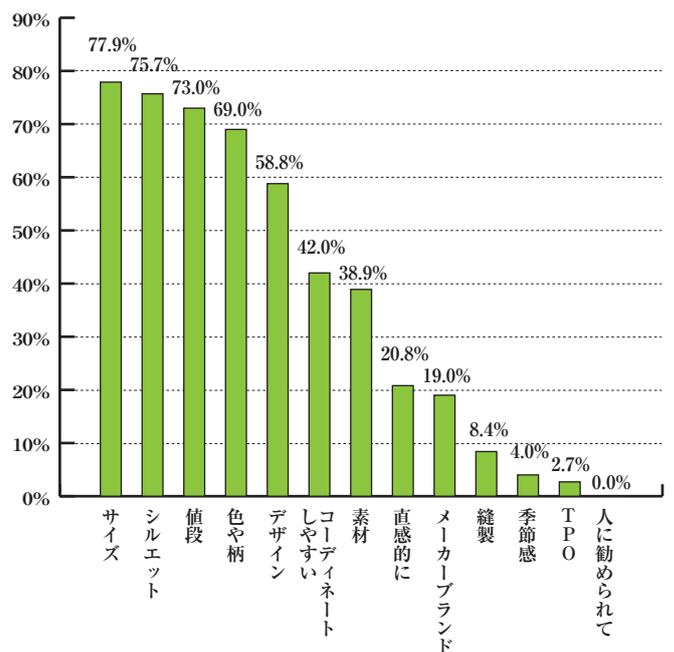


図18: パンツ購入時に考慮すること

アンケートの質問の最後に、サルエルパンツに限らずその他のパンツを購入する時は、どんなことに気をつけて購入するのかを回答者全員に尋ねてみたところ、図18のような結果が得られた。サイズ、シルエット、値段、色や柄の項目が圧倒的に多くあった。続いて、デザイン、コーディネートしやすい、素材の順であった。サイズは、体型に重要であり、値段もその時の予算に応じて考慮しなければならない。シルエット、色や柄、デザイン、コーディネートしやすいに上位を占めたことは、若者のパンツ選びの理由の特徴が導き出された。これらは、個性を大切に思えばこそその若者のこだわりであろう。さらに、パンツは時流のファッションであるのみならず、体型への考慮やパーソナリティとあいまって、上衣ほどデザインがないにもかかわらずパンツへの思いは、強く感じとれた。つまり、上衣同様、パンツ選びにも自分自身をアピールするファッションを好むことがわかった。それが、サルエルパンツのコンセプトにもなっているようである。

以上のことから、若者のサルエルパンツへの意識と動向がわかった。次稿では、これらを参考に機能性、着心地、美しいシルエットの出し方、好みの色・柄等を満足させるサルエルパンツの提案をしていきたい。

謝辞

本研究の遂行に関し、ご協力いただいた名古屋学芸大学ファッション造形学科の学部生および大学院生、中部学院大学短期大学部専攻科の皆さんに深甚の謝意を表します。また、本研究の一部は、平成23年6月に日本繊維製品科学学会の2011年年次大会(於:武庫川女子大学)で発表した。

参考文献

- 田中千代「新・田中千代服飾辞典」同文書院、1991年
- 松本敏子「たくさんの不思議」福音館書店、1989年
- 文化出版「文化ファッション大系服飾関連専門講座 20世紀ファッション」文化出版局、2008年
- 文部科学省「服飾文化」実教出版株式会社、2005年